

「理想を現実に」

市立札幌新川高校 普通科 3年 秦野夏鈴

私の将来の夢は作業療法士です。ただ作業療法士になるまでが目標でなく、患者さんとその家族を勇気づけられる作業療法士になりたいです。患者さんがリハビリをしていく中で思うように体を動かすことができずに悔しい思いをしたり、やる気を失くしてしまうことがあっても心身ともにサポートし、身近な存在として相談にのることができる存在でありたいです。私がそうなりたと思ったきっかけは中学生の頃に職業体験で伺った老人ホームです。作業療法士さんがリハビリを行っている場面を見た時に今まで想像していたリハビリの堅苦しい雰囲気とは違い、作業療法士さんと患者さんがとても楽しそうに笑顔でリハビリをしているのを見て「私も誰かを勇気づけたり笑顔にできる人になりたい」と思い、作業療法士という職業に憧れを抱きました。

作業療法士という職業は医療職の中でも心のケアや患者さんの思いを尊重して望みを叶えることが必要な職業です。私の思い描いている作業療法士になるために、コミュニケーション能力と多様な価値観と広い視野をこの留学を通して身につけたいです。患者さんの中には早く仕事や学校に復帰したいと願い努力する人から希望を失って何もやりたくないと思う人まで様々な事情を抱えた人がいます。コミュニケーション能力があるとその人がどんな理由でリハビリを行いたくないのか、どのリハビリがあっているか、などの質問を患者さんのことを傷つけることなく聞き出せます。また、多様な価値観や広い視野があると、やる気を引き出すにはどうしたらよいか、どんなところを褒めたら喜んでリハビリを行ってもらえるか、など一人一人に寄り添えるリハビリを行うことができるのではないかと思います。

夢の実現のために高校生活を通して様々なことに取り組んできました。中でもダンス部での活動に力を入れ、大切な3つのことを学びました。

1つ目に努力は裏切らないということです。私の所属していたダンス部では1年に1回、大きな大会に出場していました。前年度の大会では、先輩方についていき、できる限りを尽くしたのですが思うような結果が出ずに悔しい思いをしました。その悔しさをバネに前年度の反省を生かして練習メニューを変えたり、限界を決めずに最後まで努力し続けました。その結果、今年度は目標であった全国大会出場を果たすことができました。大会までの道りは辛くて長かったですが、努力した分だけ結果がついてくるということを知ることができました。

2つ目に仲間と協力することの大切さです。チームとして同じ目標に向かっていくことはとても難しいですが、思いが統一された時にはとても大きな力になるのだと気づきました。これはリハビリの世界でも一緒です。患者さんと作業療法士さんが同じ願いを持っていないと思うようにいきません。チーム医療の現場で働いて行く中でとても重要なことだと気づきました。

3つ目に相手の立場になって考えるということです。部活全体を仕切る時にどのような言葉で伝えたら相手に理解してもらえるか、どのような口調で伝えたらみんながやる気をもって練習に励むことができるかということを考えながら1つ1つの言葉を意識していました。また、他の誰かが全体を進めてくれている時には反応や返事をし、困っている時には、「こうしたらいいのではないか」と提案するようにしていました。相手の立場になって言動を気をつけるだけで全体の雰囲気良くなり、練習もはかどりました。

上記の3つのことは理想の作業療法士になるために必要な資質であり、これらを学ぶことができた3年間は貴重な経験となりました。

日本では最近知られるようになった作業療法士ですが、アメリカでは人気の職業第4位だと本で知りました。そのため、成績優秀者でないと成れない職種であり、高いスキルを持った作業療法士さんが多くいます。私はアメリカの作業療法士さんを実際に見て、どのような部分において優れているのか、日本との仕事の違いを見つけて、真似出来そうない所を吸収して日本に持ち帰りたいです。

趣味で聴いていた洋楽を通して海外には興味がありましたが、初めての留学で不安な気持ちでいっぱいです。ですが、新しいことに挑戦し、日本で見ることのできない建物、人、文化などにたくさんの刺激を受け、積極的になって日本に戻ってきたいです。また、アメリカで活躍する郷土の方々との交流を通して日本とアメリカの習慣の中でどのような点が違うのかが知りたいです。人柄が違えば文化が違ったり、当たり前のことも当たり前ではないと思うのでどのような点で苦労したかを聞いてみたいです。そして、たくさんを知り視野を広げて帰ってきて、より患者さんの笑顔が増えるようハリハビリができるように努力したいです。